

揚文会における〈文〉と〈文明〉の乖離

—後藤新平の演説と呉徳功の感想をめぐって—

名古屋大学大学院 許時嘉

1900年3月15日、総督府は民心を安堵する方針として、清国時代の最大級の学堂であった登瀛書院を改めた台北西門内の淡水館で、台湾人紳士を招き、第一回の「揚文会」を開催した。総督府は清朝時代に生員以上の学位を受けるもの、すなわち舉人、拔貢、歳貢、恩貢、廩生等を対象として、全島の151人に招待状を送り、そのうちの72人が出席した。揚文会の中で、「廟宇の保存」「節孝の旌表」「救済賑恤」という三つのテーマを掲げ、旧慣調査として台湾人紳士の策議と意見書を求める一方、児玉総督と後藤新平も相次いで講演し、台湾における文教の再建と帝国の近代教育の優越性を説いた。翌年、当日の流れを詳しく記録した『揚文会記事』（日本語）と、児玉・後藤の演説内容、72人の台湾人紳士の意見書をまとめた『台湾揚文会策議』（漢文）が出版され、全島に配布された。参加者は往復を除き、台北に一週乃至十日間滞在し、旅費及び日当を支給され、揚文会に出席しただけではなく、台北各地の建設や新事業にも案内された。揚文会を利用して台湾人紳士を喜ばせるほか、総督府の実学重視を宣伝し、台湾人の「移風易俗」を狙う意図がかなり強かった。ちなみに、1898年台湾人年配者を招待した饗老典から1900年揚文会の開催に至った背景では、児玉総督が主催者、後藤新平が後援者の役割を担っていたように見える。後藤新平の追憶によれば、それは人民における総督の威信と慈愛的な形象を作り上げるためだった、という。

総督府が揚文会を借りて台湾人の懐柔または統治力の再確立を狙ったことは既に多くの研究者が指摘している。そこに新帝国に隷属する新たな上流階級を立て直そうとする総督府の意図が潜んでいたことや、台湾人紳士向けの「改朝儀式」を行ったこと、さらに同文を利用して「中華帝国の宰相」や「擬似皇帝」として清国時代の封建政権の権力体系を模倣し、台湾人紳士を新たな帝国統治の秩序に再編しようとしたことは論者に相次いで指摘されている。それを踏まえて、ここで注目したいのは、揚文会という空間の中で、発信者と受信者が各々相違する知的回路を経由して「揚文」への共感を見事に共有する現象である。先行研究の指摘しているように、揚文会の観光旅行が台湾人紳士に「近代文明」への共感を呼び起こすことができたその根本の理由は、後藤の演説における国体の天皇制イデオロギーや近代的教育の宣伝からの影響よりも、本来の儒学的な価値観（「格物致知」の概念）が大きく作用したのだと言ってよい。興味深いことに、揚文会の「成功」はこの「乖離」の作業による「意思相通」の成立にある。それは表面的に「同文」という漢詩文リテラシーを利用する総督府のポリティクスが効果的であったと解釈される一方、その深層に、特に「文」という概念に対しては、台湾人紳士と総督府に何か共通／対立するメンタリティが各々存在するのか、ということであらためて考えなければならない。本論文では揚文会を分析対象とし、植民地時代の揚文政策に潜んでいた多義性とその多義的意味の共存を成立させた思想的状況、背景を考察して試みたい。